講 談 社

昭和33年10月30日　第1刷発行　©

著者　丹羽文雄（にわふみお）

東京都文京区音羽町3—19

¥260　発行者　野間省一

東京都千代田区飯田町1—28

印刷所　株式会社文弘社

発行所　東京都文京区音羽町3—19　株式会社　大日本雄弁会講談社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。　（大進堂製本）

PRINTED IN JAPAN

染められた感情

装帧

久保守

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章

海が、地ひびきを立てて鳴っていた。海岸道路の岸壁にぶつかる波は、道路にまでおどり上ろうとする。いく度も失敗しながら、根気よくおどり上った。沖は真暗である。初島の灯も見えない。波は、街灯をぬらしていた。灯の高さまで飛沫をあげる。瞬間、小さい虹が出来た。或いは、飛沫にうつる灯の色だったかも知れない。

三階建の温泉旅館、迎日荘は、階下だけがことのほか明るかった。客がほとんど階下に集まっているらしい。そのわりに玄関には客の出入がなかった。ロビーのあたりに、人々が群れている。夜の海の気味の悪い唸りが、ロビーまでは届かないようであった。暗い冬の海と明るい旅館のロビーの対照が、印象的である。海岸道路を歩いている人は、極くまれであった。

ロビーの片隅の長椅子にかけている勝又三知は、海の地ひびきをかすかに感じていた。今夜の海は相当に荒れているな。となりに、雑誌記者の土岐が腰を下していた。土岐は人々の背後から、ロビーの中央で唄っている流行歌手を眺めようと、時々中腰になった。立ち上って見物するほどの興味はないのだが、その声をきいていると、その女の顔が見たくなるものである。勝又は、流行歌手の唄には何の興味ももっていなかった。勝又はしきりと、ロビーの隅の売店にいる聖子を眺めていた。つとめて聖子を眺めることにしていた。聖子も、勝又の眼差を意識している。うっかり聖子から目を放したならば、支柱を失った草花のように、聖子が凋みかえる危険があった。たれも売店には用はない。聖子をふりかえるものはない。聖子は人々に押されて、ロビーの隅で小さくなっているようであった。百人近い人々の中で、勝又だけが聖子に関心をもっている。そのことを本人に、つづけさまに知らせている必要があった。聖子は勝又の眼差だけで、辛うじて売店の中で立っていることができるようであった。

「土岐君、のもうか」

「いや、お酒なら夕食の時いただいていますから」

「シャンペンなんて洒落たものはないだろうが、ハイボールなら出来るよ。いま頃東京にいたら、面白い目をみたろうに、気の毒で、折角のクリスマスを犠牲にさせたのだから」

「とんでもない。クリスマスなら、しょっ中やっているようなものです。たまに東京をはなれて、波の音をききなが

ら眠るのも、休養になります」
「そうとでも思っていなければ、クリスマスを棒にふって、熱海まで原稿とりにくるバカバカしさの理合わせは出来ないからね」
勝又は、聖子を呼んだ。聖子がそばに来た。ハイボールをたのむと、聖子は再び売店のカウンターの中にはいったが、ハイボールをつくる動作が生き生きとして眺められた。自分の存在をみとめられたような張合いを感じさせた。カウンターの中でしょんぼりとしている姿は、そのまま迎日荘における聖子の位置を現わしていた。勝又は、そんな聖子の位置が気になってしようがないのである。このままつづけられる位置とは思えなかった。いつかはその位置が変わる。それは聖子自身が変えるのか、迎日荘の人々が変えるのか、それとは全く別な人の手によって変えられるか、いずれかである。
拍手が起った。
「次は、踊りですね」
と、のび上った土岐が報告した。ロビーの中央で、振袖姿の娘が二人、踊りはじめる姿勢をとっていた。伴奏は、レコードである。聖子が、ハイボールをはこんで来た。一つを土岐の手に取らせると、勝又は声を低めて、
「今夜来られる?」
聖子の顔に、突然羞恥の色紙が貼りつけられたようになった。同時に聖子はするどくあたりに神経を使うようだった。動揺と羞恥とおそれのいりまじった表情を、勝又はたのしむように眺めやった。聖子は何とも返事をしないで、ひきさがった。うしろを短く刈り上げた聖子のうなじが、青いように見えた。
ロビーに集まった人々は、大半が客ではなかった。料理人や女中も顔を出している。近所の旅館の人達も集まっていた。が、今夜の主賓は客ではなく、迎日荘と姻戚関係にある人達であった。その姻戚の知合とか、娘の友達といった連中である。東京や静岡や小田原や沼津から集まった人人であり、それらの人のために迎日荘はどの部屋もふさがっていた。正真正銘の客といえば、五組ぐらいにすぎず、その中に勝又と土岐がはいっていた。毎年クリスマスの夜は、迎日荘の親戚が集まり、営業をわすれて、たのしく一夜をすごす習慣になっていた。雇人達にとっては、無礼講もかねている。勝又はたまたまその夜にぶつかったわけである。客も見物に誘われたが、勝手のちがうロビーの雰囲気のため、遠慮勝ちにうしろの方で見物をしている。男衆や女中のかくし芸も披露された。小さいバンドが、わざわざ東京から聘ばれている。かけ出しの流行歌手もいっしょだった。迎日荘の当主の俊樹夫妻や、母親の賢子は、行事

の進行係でもあり、幹旋係でもあるのか、人々の間をたえず縫って歩いていた。尻込みする女中をけしかけたり、おだてたり、舞台の指図をしたり、主人役とすれば、そうしないではいられない。今夜だけは、ふだんのように女中に命令するわけにもいかない。今夜だけは、迎日荘米内家の人々が気をつかい、働かねばならなかった。米内家に属する聖子は、最初から無視されていた。聖子には売店の責任があるといわんばかりに、米内家の人々といっしょに働くことが禁止されているようであった。が、売店にはもう一人、十六の女中が聖子の助手となっているのだった。去年のクリスマスの夜は、聖子は俊樹夫婦や賢子といっしょになって、幹旋役をひきうけ、進行係もやった。聖子は米内家の一人であった。ロビーに集まった人々は、そのことを認めていた。が、今年の聖子は忘られている。大勢の人々が忘れているよりもまっ先に、俊樹夫妻や賢子が忘れていた。聖子には、米内家の一員としてふるまう権利がとりあげられているようであった。

「もうすこし仕事が残っているから、ぼくは部屋にかえるよ」と、勝又は土岐に言った。「君はゆっくり見物してるといい。明日はまちがいなしに原稿を渡すから」

「それじゃぼくは、もうすこし残ります」

勝又はのみほしたコップを、カウンターのところに持っていった。聖子がうけとった。勝又は心の奥をのぞきこむように聖子の瞳を見つめた。聖子が困って、首をふった。が、先程のささやきに対する返事のようではなかった。勝又は微笑を残すと、人々をかき分けるようにしてロビーを出た。階段を上りながら、勝又は聖子を見ているに忍びないと思った。人々のうしろから、のび上るようにして聖子は見物をしている。そんな位置しか与えられていないのである。聖子は自分の位置をどう考えているのか。米内家の人々の心が判らないのだろうか。二階の廊下に出ると、海の音がつよく聞えた。どこかの窓が開いているらしい。勝又は音の方向に歩いた。案の定、一枚のガラス窓が小さく開いていた。それを閉めて、自分の部屋にはいった。

夜の支度がされているので、机は床よりに片付けられている。机には、原稿紙がひろげてある。勝又は床の間に腰を下すように、窮屈に机に向った。たばこをくわえた。勝又は聖子の心を思った。聖子は、昨夜俄かに人生が書きかえられたほどの衝撃をうけたにちがいないのである。今朝、勝又がロビーに下りていくと、聖子は勝又と顔を合わすまいと努める風であった。それでも余儀なく眼が合うと、聖子は狼狽した。それがあまりに正直であり、露骨すぎた。知らない人に見られたら、二人の間に何かあったのではないかと疑われるほどであった。二十八歳の、二度も

結婚の経験のあるひとのふるまいではなかった。聖子が自然にふるまっているとすれば、それはよくよく性格的なものである。一年前から勝又は、迎日荘を仕事場に使うようになっていた。月に一度は来た。来れば、一週間は滞在する。米内家の人々とも親しくなり、迎日荘では大切な客として扱われるようになった。迎日荘の内幕も、判るようになった。が、売店を預かる聖子が娘々しているので、勝又はながい間だまされていた。二十三、四と思いこんでいた。迎日荘における聖子の位置が、勝又にはのみこめなかった。女中達は、

「聖子さん」

と呼んだが、聖子は賢子を呼ぶのに、

「お母さん」

と言い、俊樹やその妻の悦子に対しては、名前を呼んだ。勝又は初め、当主の妹だと思った。が、ちがうらしい。しかし、いずれ親戚関係にあるのだろうと想像した。迎日荘では、女中はお仕着せをきていたが、聖子だけが自由であり、主に洋装であった。スポーツをやったことがあるらしく、一米六〇の姿体はのびのびとしていたが、本人はのびのびとしていることを恥じているようであった。すこし猫背になっていた。それに顔色が冴えなかった。胃が悪いと、勝又は聞かされている。が、正直に言って、最初の間は勝又の目にとまらなかったと言ってよい。これと言って特色のある女性ではなかった。聖子より魅力のある女性を、仕事の関係上、いく人も見ている。勝又は女優や、ラジオの声優や、テレビに出る女優の美しさには慣れていた。迎日荘にやって来て、売店の聖子に挨拶をうけると、その存在を意識するが、その他の時には聖子の存在など思い出しもしなかった。その勝又三知の心をとらえるようになったのは、聖子の様子からである。いつ見ても、聖子は悲しみに沈んだひとのようであった。若々しい娘々した姿体に似合わず、聖子は悲しみに押えつけられたひとのようであった。何か持病のひとが陰気な感じを与えるように、売店のカウンターにいる聖子が勝又の気になりはじめた。

一度、勝又は妻の粧子をつれて来たことがある。波の音が高いというので、妻はよく眠れなかったらしい。一夜で逃げ出したが、勝又は、波の音のおかげで、隣の部屋の騒騒しさも気にならないのだ。海に向った二階の左から二つ目の部屋を、自分の仕事場にきめていた。

勝又は、女中に訊いた。

「お気の毒な方ですわ。先の旦那さまさえ生きていたなら、聖子さんはいまごろ若奥さまで、幸福にくらしていられたのです」

「いまの当主は？」

「先の旦那さまの弟さんです。大学で講師をしていらしたのを、無理にお迎えした旦那さまでございます」
「聖子さんには子供はなかったのか」
「ございません」
勝又はロビーに出ると、つとめて聖子と話をするようになった。初めの内は、カウンターから出て来なかった。慣れると、ロビーに客のいないような時、聖子は勝又のそばに来た。が、いっしょに並んで長椅子にかけることはなかった。いくら親しくなっても、客に対する一線は越えなかった。
かえっていく時、勝又は玄関のところで車にのりこんだ。番頭や女中や来内家の人々が見送りに並ぶ。親しくなってから聖子も見送りに出るようになった。そんな時、勝又は聖子の顔に視線を置いた。万遍なく眺めるというのではないので、勝又の視線は聖子にある感じを残すようであった。が、そばの人にもそれと判るのだった。
仕事に追われて、とうてい東京では書き上げられないとなると、勝又は東京を逃げ出すのである。迎日荘にいけば、予定どおりの仕事が出来た。締切日に迫られて、苛々している勝又を見ると、妻が言った。
「迎日荘へお電話しておきますわ」
勝又は、手ぶらで出かけてよかった。迎日荘には、洗面道具も原稿紙も用意されていた。受持の女中もきまっている。食事には必ず一品おそうざいがついた。旅館の食事に飽きないようにという宿の心づかいであった。勝又は熱海に近付くにつれて、聖子の顔を思い出すようになった。しかし、それは漠然とした気持であった。聖子の立場に同情をしているというのが、その気持の大部分のようであった。が、その気持には発展性がなかった。
「ぼくの部屋へ話をしにいらっしゃい」
というようなことは、一度も口にしなかった。ロビーに下りていって、何かと話をつづけ、その間に慰めてやることが出来たらよいと思っていた。
深夜の廊下で、聖子が湯殿に通うのを見かけたことがある。男物のような、綿のたくさんはいった丹前を着ていた。すこしもいろけがなかった。聖子は工合悪そうに顔を伏せて、勝又とすれちがった。三十を越えた女のように見えた。
つっ立っている聖子を相手に椅子にかけて話をしていると、何か迫って来るもののあるのに勝又は気が付いた。それが生理的なものか、精神的なものか判らなかった。漸く親しくなるにつれて、勝又の内部で聖子を女性として新しく感じ始めたのかも知れなかった。聖子も漸く気を許して、何でも話すようになっていた。ただその打ちとけた気

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

持が、その親しさにつけこんで、相手の性別を改めて感じさせるようになったのではあるまいか。それなら男と女との間に生じる陳腐な感情の移動にすぎない。勝又は段々と、それが生理的なものであることに気が付いた。

「来月も来て下さいますか」

「今からは判らないが、いずれ東京を逃げ出すことになるだろうね」

「毎月いらして下さるので、当てにしてますわ」

「聖子さんの誕生日は、クリスマスと言ったね、じゃ、来月だ。多分十二月も来ることになるだろうが、何かお祝いを持って来よう」

「まあ、嬉しい」

感情表白に、十代の娘のようなところがあった。両手を合わせ、胸のところでねじて、首を傾ける。その胸部には、苦しいほどの二つの隆起があった。小娘のような仕種と、みごとに成熟した肢体とが似合わなかった。そう言えば、男のような髪の刈り方も、その肢体にはふさわしくなかったが、ふさわしくないところに聖子独自のアンバランスの魅力があるようであった。

クリスマスの三日前、勝又は迎日荘にやって来た。銀座のデパートによって、ゲランのミツコを買った。

「シャネルもいい香水だが、聖子さんにはミツコが合うような気がする」

売店の小さい女中が眺めているところで、勝又は堂々とプレゼントした。女中達に知れるであろうが、勝又はかまわなかった。

年の暮に近付くと、温泉旅館はひまになる。迎日荘もその例にもれなかった。旅館では女中を動員して、夏物の整理に忙しかった。勝又が一ト仕事終えて、ロビーに下りていくと、もの忘れしたようにロビーには誰もいなかった。売店の小娘もいない。聖子がカウンターの中で、雑誌を読んでいた。ロビーには螢光灯がともっているので、昼間の明るさを錯覚させる。が、生きていない明るさであり、あたたかさは感じられない。玄関をとおして、海が鮮明に眺められた。初島も近付いたように、くっきりと線を描き出していた。珍しく聖子が向いあった椅子に腰をかけた。客がないので、気を許したものとみえる。その顔を勝又は見守った。唇がすこし大き目である。上唇が、そりかえっている。鼻が上向きについている感じは、映画女優のたれかに似ているような気がする。

「きれいな手をしているね」

ふっくらと肉をつけた聖子の手は、形がよく、指が長かった。えくぼが出来る。爪が長くて、まん中がこんもりと盛り上っていた。勝又はこれほど美しい指を見たことがな

い。勝又は、その手をとった。撫でたり、曲げたりした。妻は痩せているのではないが、手の表は筋ばっている。そこまでは肉がまわらないのか、手だけを見ていると、年齢以上を感じさせる。二十八歳にもなりながら、聖子がこれほどふっくらとした若々しい手をしていることが、奇蹟のようであった。

「実に柔かい。小さい子供の手に触れているような感じがする」

「あんまさんが、柔かい手のひらだと言いますわ」

聖子は、手を預けっ放しになっていた。

「炊事をしたことのない掌だな。重いものを持ったこともないんだろう」

「ごはんぐらいは炊けますわ」

「もっとも今日では、電気炊飯器というものがあるから、スイッチを入れておくと、ひとりでにごはんが出来上る」

柔かくて、美しい手が印象的だった。こういう手には、度々触れたいものだと思う。勝又は、美しい形の柔かな手から聖子を見直したと言っても、誇張にはならない気がした。この手を大切にしたいと思った。

「お客さまに時々ダンスに誘い出されます。君の手は柔かだと仰言って下さいますわ」

あまり手ばかりを褒めているのでは、勝又は気がとがめた。美しくない女を褒める場合には、髪を褒めたり、耳の形を褒めたりするものである。何かひとつ褒めるに足りる対象を求める結果である。手にばかり拘泥っているのでは、あなたの顔は美しくないと別の言い方をしていることになりそうだった。

「聖子さんとは、恰度一年の馴染だ。聖子さんの履歴も、すこしは判った」

すると、聖子が目を大きくして、

「いえ、いえ、御存知ありませんわ。私の過去のことは……誰も知らないんですもの」

媚態からそう言うのではなかった。痛いところに触られたような聖子の狼狽であった。何か過去にあるな。それを知りたいと勝又は思った。

「不思議と聖子さんのことが気にかかるんだよ。おかしな感情だ。迎日荘に来るのは、仕事のためだが、もう一つ、聖子さんがその後どうしているかと、それを知りたい気持も強いんだ」

これが恋情であるなどとは、いくら放縦な勝又三知にも云い得ない。が、聖子が気にかかる自分の心の状態は、恋愛に似ていた。聖子の肉体を意識するようになったと言うのでは、いやらしい興味の持ち方といわれても仕方がなかった。が、その欲望は強くなかった。その欲望には、すこ

しも発展性がないと勝又は考えている。聖子と結ばれるのが目的であるなら、とうに結ばれていただろう。結ばれるように努めたにちがいないからである。しかし、一方には、折角気に入っている仕事場を、恋愛事件でわれから居づらくするのはくだらないという考えもあった。その境遇に同情をし、どこか病んでいるような聖子が、何ということなしに気にかかるのは、いわば通りすがりの人情だったかも知れない。馴染客の中には、勝又とおなじような気持を聖子に寄せている人もあるかも知れなかった。

「胃が悪いといって、そんな元気のない顔をしているが、一度徹底的に診てもらったらどうかな。いい医者を紹介してあげるよ」

「ごはんが、すこししか戴けませんの。すぐ吐くような気がします。お母さんのすすめで、お灸をしたんですけど」

「お灸？　どこに」

「背中ですわ」

「あとが残ったろう」

「二列にお灸のあとが、大きく残りました。それでもいっこうよくなりません。お母さんが、お灸をした方がよいと云うものですから、そうしたんですけど」

「嫌だと思っても、聖子さんには反対が言えなかったんだろう」

聖子は苦笑して、肯定も否定もしなかった。聖子の性格を端的にみるような気が勝又はした。それにしても、聖子の手は美しかった。ふくよかで、柔かくて、形がよかった。ギリシャ彫刻の中で見かけるような女の手であった。

「これは、珍宝だ。大切にしなさい」

と、勝又は手をはなした。

「何ですか」

「その手だ。聖子さんは自分の手だから、それほどとも思っていないだろうが、ひとのと較べてごらん。迎日荘に来るどのような客の手も、おそらく聖子さんほど美しい形をして、若々しいのはないだろう」

聖子の手をみていると、しきりと最上級の美しいものへの聯想が浮かぶのだった。この手を発見しただけでも、勝又はよかったという気がする。が、これ以上手にばかり拘泥るまい。

その夜、勝又は夜おそくまで松の内用のラジオ・ドラマを書きつづけていた。もう一つ、クリスマスまでに連載物の少女小説の一回分を書き上げねばならなかった。雑誌社から取りに来ることになっている。年内に原稿をまわして、画家に絵を描いてもらわねばならなかった。勝又は、書くことが早かった。想がまとまると、ひと晩に三、四十枚を書き上げる。ドラマの原稿は余白が多く残るとは言え、

三、四十枚はかなりの仕事である。夢中になって書きつづけていると、女中がお茶をはこんで来ても、意識の外にぼんやりと感じるだけで、書くことに没頭している。頭に浮かぶイメージを、どうしたら早く、器用に表現出来るか、そのことに苛立っているようにみえた。夜の波の音が、迎日荘を包んでいた。隣室に客がいるのかどうか、気が付かない。海の音が、一切の物音を抹殺してくれる。廊下から控えの間がつづき、そこから勝又が机に向っている十畳の間となるのだったが、廊下の襖の開いた気配を勝又は知らなかった。物音をころして、誰かが控えの間にはいったようである。勝又は、気が付かなかった。控えの間にはいったその人は、そこでしばらくためらっていた。その人は仕事をつづける勝又に気がねして、戻ろうとすれば、もう一度廊下の襖を開け閉めしなければならなかった。その人には、それだけの勇気もなかったようである。その人は、十畳の居間の襖のところでためらった。坐りこんでしまった。そこは、灯が消えていた。しかし、どれだけか経つと、その人は息をこらして十畳の襖に手をかけたが、おそるおそる開けるという風であった。三インチ開いた。五インチほど開いた。その人の顔がのぞける程度に襖がひかれたが、机上の勝又は気が付かず、ペンを走らせていた。机上には、スタンド・ランプがともっている。その人は顔の幅だけ襖を開けると、それ以上を開ける気力を失ったようであった。その人は、勝又に笑いかけた。が、反応はなかった。その人は、自分の位置に当惑をはじめたようであった。招かれざる客であった。泣き出しそうに顔を歪めた。勝又は、まだ気がつかない。襖が開いたと同時に勝又が気が付いて、こちらを見てくれなければいけなかった。目が合えば、その人のいっしょけんめいな気持は救われたにちがいないのである。その目を当てにして、客の部屋にしのんで来たといってもよかった。その人は、声をかけることも出来なかった。その人は、勝又三知のこわい正体を見届けたように、とりつくしまを失った。と言って、再び襖を閉め直す心のゆとりもなくなっているらしい。が、そのまま時間が経てば、自ずとその人は冷静をとり戻すにちがいなかった。はしたない自分の行為がおそろしくなり、恥しくなったにちがいないのである。自分で自分の身の始末をつけなければならないのだ。惨めな思いの中に転落するだけであった。ここまで自分をかり立てた激情がどれほど非常識なものであったか、恥しいものであったか、それをその人自身の手で思い知らねばならないのである。無惨なことであった。

勝又の目が、ふと原稿紙から外れた。勝又は、何かを感じた。何気なく襖の方を眺めやった。控えの間の暗を背に

して、細く開いた襖のすき間に白い顔が浮んでいた。勝又は、ぎょっとなった。夢の中のような気がした。それが聖子の顔であると気が付いたのは、しばらく経ってからである。勝又の耳に、海の鳴る音が新しくはいった。ペンを措いた。

「おはいり」

と声をかけた顔には、微笑が浮んだ。約束をしたわけではなかった。自分の部屋へ話をしに来いと誘ったこともなかった。勝又は、聖子がこの部屋に現われるであろうとは一度も当てにしたことがない。のぞみもしなかった。そこまでまだ気持が昂じていなかった。聖子が救われた人のように、すばやく襖をあけ、襖をしめた。鬼に見付からなくて、よかった。小娘のように聖子は肩を竦めて、首尾よく鬼の目を盗んだことをよろこんでみせた。勝又は、小さく声に出して笑った。聖子は白っぽいものを着ていた。細い袖に分れ、ズボンになっている。

「もっとこちらへいらっしゃい」

膝でにじりよった。聖子は思いつめた表情で、勝又を見つめた。勝又は、聖子の来訪をいかにも当てにしていたのだといわんばかりの顔をつくった。やっと来てくれた、ありがとうとその表情が言っていた。臨機応変のこの程度の表情なら、それほどおかしいものでもない。聖子はパジャマ姿であった。白いタオルの生地に、細い赤い竪縞がはいっている。ナイト・ガウンでも着ているのなら、まだしも、男の子のようなパジャマ姿では恰好がとれないではないか。五尺三寸もあるパジャマ姿には、女らしさが殺されている。地の厚いタオルのズボンでは何かひどく事務的な感じであった。初めて勝又の部屋にしのんで来たというのに、この恰好では、湧き出る情緒も立ち消えになりそうである。勝又はおかしくなった。かつて勝又は、ある女と温泉宿で落合う約束をした。その女は東京からやって来たが、夜になった。むろん女は、その夜の内にはかえらないつもりであった。一応旅館の浴衣に着かえたが、いざ床につく時になると、小さいトランクにしまって来た薄紅色の、羽二重の長襦袢に着かえた。勝又との第一夜を女はかざりたかったのだ。長襦袢は新調のものではなかったが、女は洋装で来ていた。宿の浴衣では、とおり一遍のものになる。女のデリカシイが、勝又にはうれしかった。女は戦争で亡くなった。しかし、まだ浴衣姿であれば、聖子がしのんで来たという情緒をかもし出すのに役立ったかも知れない。タオルのズボンの膝を揃えて、両手を膝に置いた恰好はあまりに殺風景すぎる。ちょっと扱いようがない気が勝又はした。

「ここへはいるのに、誰にも見付からなかったろうね」

「大丈夫ですわ」そう答えて、聖子が両手で胸を押えた。乳房の下を押し上げるようにする。「こんなに胸がどきどき鳴って……」

こちらがおかしがっている以上に、本人は男の子のような恰好に収拾がつかなくなっているのではないか。洋間というのなら、パジャマ姿もそれほどおかしくないだろうが、十畳の部屋は純和室につくられている。聖子の気持を救ってやらねばならなかった。勝又はスタンド・ランプのシェードを押えた。二人の方に多く陰をつくり、身を泳がせて、聖子の手を取った。半分は自分の努力でにじり寄って来たが、勝又は意外に大胆を感じた。聖子には、この機にのぞんだためらいも、おそれもなかったようである。羞恥さえも、すでに始末がされているようである。勝又の腕に抱かれたが、唇が近付いた時、聖子は怯えたように顔をそむけた。それは最後の躊躇だったかも知れない。怯えは、すぐに解消された。

腕の中で、時々聖子のからだが痙攣した。抱かれることに慣れていないからであろう。結婚の経験があるとは言え、初めての異性の腕の中であった。抱かれている自分の恰好を、聖子は意識するらしかった。説明がつかなくなり、自信がなくて、それが痙攣になるようであった。すこし顎えがひどすぎると勝又は感じた。唇を合わせてしまえば、それで一応は一線を越えたことになる。不安もおさまり、自然とからだ中の力が抜けていくものである。が、聖子はいつまでもからだの一部に力をのこしていて、それが時々痙攣となって現われるようであった。自分を減し切っていない証拠のようであった。

「夕方、新宿までいって、結婚の話を断ってきました」

出しぬけにそう言った。

「新宿までいった?」

「いいえ、熱海の新宿です、そこに親戚があります。この夏からあったんですけど、迷ってましたの。思いきって断って来ました」

そのことと、深夜勝又の部屋にしのんで来たこととはつながりがあった。勝又は、それを感じた。

「どうしてその話をぼくにしなかった? 相談にのって上げたのに」

「迎日荘の人達も知らないことですもの」

「おや、その親戚というのは、聖子さん側の親戚か」

「迎日荘では、私がその親戚と親しくするのを好みません。一度もここに来たことがありません。結婚する時、親戚とは手を切るということが条件だったくらいですわ」

「聖子さんが未亡人となって、迎日荘に残っているのを、その親戚は気にしてたわけだね。ぼくのように聖子さんの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.